

寄稿 混迷の時代に必要なもの一

武道を通し、心の復活を目指す

黒木 惇哉 (英語 熊本県)



教育の荒廃が叫ばれて久しい。教育再生会議の議論の中には、体罰の復活、出席停止、社会奉仕活動、バウチャー制度といった良いアイデアはあるが、しかしこれといった打開策はないように思われる。

今と昔の違いと言えば、私の世代までは、小さい頃、よく外を走り回っていたものだ。相撲をとり、殴り合いの喧嘩もした。学校では柔道・剣道の授業があった。体をぶつけ合い、共に汗を流すことで、お互い気心が知れるようになったものだった。今は、学校で柔道・剣道の時間は無いそうだ。もちろん取っ組み合いの喧嘩もない。あるのは陰湿な虐めであり、体育会系の代名詞であった野球部内でさえも、次々とターゲットが替わるババ抜きのようないじめが蔓延るようになっていく。

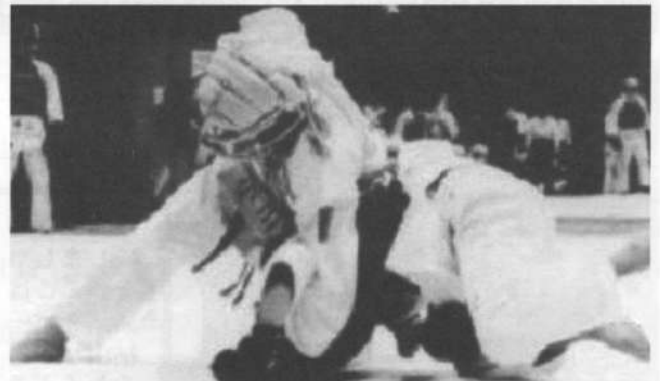
この教育の荒廃を解く鍵は、武道にあるのではないかと私は考えている。武道を通して懸命に体を鍛え、汗をかいていると、それまでの荒っぽい性格が穏やかになり、礼儀正しくなり、満ち足りた顔になる。この事実の意味をもっとよく考えてみるべきだろうと思う。私は現在、日本拳法と大東流合気柔術という武道の練習を日々欠かさない。日本拳法は11年目を迎え、今では指導員資格を頂戴し、師範を名乗れるまでになった。しかし、そんな私も最初は、単に護身術と体力増強だけが目的だった。大学で体育会拳法部に入り、受験でなまっていた体を一から鍛え直していく中で、日に日に気力が充実していったのを覚えている。頭も鍛えないといけないことも知った。格闘技とは、瞬時瞬時に自分で戦略と戦術を考え出さなければならない孤独な戦いであるのだ。共に練習する仲間への思いやり、支えてくれる先輩や指導者に対する感謝の気持ちも身に付いた。そして社会を経験していく中で、日本拳法を通して体得した、忍耐力、克己心、柔軟性、効率性、感性、礼儀といった美徳が非常に役立つのを覚えている。

日本拳法とは、古代相撲を源流とする、昭和7年に

関西大学で始まった日本最初の総合格闘技である。剣道のように防具を付け、試合を重視し、他者と競い合うことで、技術を向上させるものだ。大東流合気柔術とは、合気道の源流であり、その歴史は新羅三郎源義光より始まり、武田家、その後は会津藩の御留技(門外不出の技)であった。その長い歴史の中で形成されてきた武士文化には、武道というものの尊さを実感させられる。

騎士道の国、イギリスのエリート教育ではとにかく体を鍛えさせると聞いている。オックスフォード大のラグビー部に、スポーツ推薦で固めた関東学院大のラグビー部が勝てないのだ。その肉体への関心は、今の日本にとっても参考になるものではないだろうか。

廢刀令以来、武士文化は消えつつある。かつての日本のエリートたちは、貴族や大臣、最高裁長官でさえ、



日本拳法「車倒からの仕留め技」

何かしらの武道の心得があった。そして和歌も詠んだ。新渡戸稲造の言う武士道とは、強さから来る自信、自信から来る余裕、余裕から来る優しさ、優しさから来る礼儀、礼儀から来る忠義といった道徳体系である。死を常に意識することによって生における緊張感が生まれてくるのだ。真に強い人とは判断力に富み、柔軟である。この日本独自の道徳体系である武士道を身に付けるためには、何よりもまず肉体を鍛え、強くなることが肝要であると考えている。



お待ちどう様でした。ついに単語必携「日英露葡版」が完成し、発売中です。関係者の皆様お疲れ様でした。お知り合いに是非ご紹介願います。

2008年度新役員紹介(敬称略)

名誉会長	西嶋 博孝
代表	田崎 徹
副代表	廣川 達夫 武内 早苗
事務局長	柴田 光恵
理事	山下 美枝子
	相澤 未央
	水谷 みずほ
	永利 貴子
	大河原 麻子
	尹 今連

編集後記

昨今、通訳案内士試験が様変わりしている。韓国語、中国語のガイド試験については、海外4ヶ所(ソウル、台北、香港、北京)での受験が可能になったことで、国内の合格者が従来の3割と減少している。英語合格者が増える一方で、今年は韓国語の合格登録者が1人もいなかった。ガイドの質と共に、国家試験のあり方についても疑問の声が挙がっている。